

大陸式決算・締切り法の原点

——十七世紀末葉、イギリス東インド会社の実務によせて——

茂木虎雄

はじめに

- 一 C元帳の勘定体系と、その計算構造——ストック勘定と「決算」残高勘定——
- 二 A・マルコム簿記書の決算理論とその計算体系
- 三 簿記教育と簿記実践

はじめに

本稿は十七世紀末葉、一六六九年四月より一六七一年四月にわたるロンドン東インド会社のC元帳と、一七三二年のマルコム簿記書を史料として、今日の簿記理論、さらに簿記教育の導入部を考えてみたいとするものである。

今日の簿記教育は複式簿記の理論的、記帳実務的理解を深めることを目的として、手記式簿記による商業簿記——商品売買業という企業の簿記、またサービス業という企業の簿記——の解説からはじめる手法をとり、記録・計算能力を養うことをめざしている。

大陸式決算・締切り法の原点

対象を商品売買業簿記に求めるか、またサービス業簿記に求めるか。これは複式簿記の計算構造をいずれによって説明することがわかりやすいかという議論になるが、歴史論的にみてどちらともいえないように思う。両者に正当性が主張されている。商業簿記の形成過程をあとづけるべく簿記史は体系化されて十五世紀初頭のペニスで完成したとする議論が伝統的、一般的な理解であるが、銀行業の複式簿記についても考察の眼をむけるべきであるとして、一一年のフロレンスの両替商簿記に複式簿記の原型を求める考え方もある。これは現金勘定の増減から損益計算をなすもので、一種のサービス業簿記といえる。

損益勘定という名目勘定の出現・存在の理解には入門段階では困難を感じる。まず入門段階で、名目勘定という抽象的な勘定を設定し、実体的「実在的」勘定との対応的体系化に複記式計算機構の成立をみようとするが、損益計算がなされてこそ複式簿記であって、入門段階では抽象的存在の認識に困難を感じるものであった。商品売買業簿記の方が具体的であろうか。簿記学入門を商業簿記で行う。

いま大陸法的決算法の原点をみさだめようとするが、これは開始残高勘定から始まり決算残高勘定で完結する勘定体系で、在高が具体的に認識されるのは商業簿記のなかであった。決算の計算構造の説明は商業簿記の方が、サービス業よりも具体的である。ここではイギリス東インド会社という企業（商社）の簿記法のなかからこれを見て、開始残高勘定と決算残高勘定の実際から、その存在形態をみつめてみたい。

イギリス東インド会社のあるイギリス（大ブリテン島）において、大陸法が十七世紀末に実践されていた。大陸法はヨーロッパ大陸でのみ行われたものではない。誰れが「大陸法」と名づけたであろうか。「英米法」も同様であるが、その名称の起源をさぐることも必要であるがここではふれない。案外、日本でつけたものかもしれない。

決算方式には大陸法と英米法があるとする説明は一般的であるが、両方とも、これが典型というものはない。大陸法において開始残高勘定の設定を必ず必要とするか、また当期の決算残高勘定と翌期の開始在高勘定は同一内容であるかどうか、理論的には様々な理解がなしうるし、実務的にも区々であるが、ここではC元帳とマルコム簿記書を資料として一個の大陸法的決算法をみつめてみたい。

簿記教育において決算手続の説明は大陸式決算法と英米式決算法の二つによって行われる。高等学校商業科の教科書では英米式決算法のみが説かれている。中村忠教授著『最新簿記会計Ⅰ（改訂版）』（一橋出版・昭和六〇年度）の決算の章の説明と勘定記入の方法にこれが出ている。文部省の検定をパスしているが、ここでは大陸法は説明していない。大学で使用するために書かれた簿記書（簿記教科書）の殆んどにおいては二つの方式の説明がなされている。実務的にみて大陸法の方が手数がかかるように見えるからであろうか、英米式方法が一般的であるようである。英米式決算法こそが決算手続の中心に立つと考えてよいか。本稿では大陸式決算法の歴史的起源と一つの存在態様を示してみたい。筆者がここに大陸法を問題とするのは複式簿記が、取引記帳が二重（二面）のバランス記入にたち、記帳のすべてにバランスが貫徹することに本性をもつと考えるとき、複式簿記の本質の説明に大陸法は有効であるとおもえるからである。これが簿記教育の入門でまず問題とされるなかで「平均」思考がねられるからである。

大陸式決算法について片野一郎教授の説明⁽¹⁾を学びたい。教授は「1、〈閉鎖残高勘定〉を設け、すべての資産勘定・負債勘定・資本勘定（の在高 \parallel 残高）を（決算）仕訳を通じてこの勘定へ振替える。この勘定の貸借が一致したら決算の記帳が誤りなく行なわれたとみて、収益・損費・〔集合〕損益および資産・負債・資本・閉鎖残高の諸勘定全部に閉鎖記入（締切り）を行う」という。ここにカッコを付けた記載は引用者（茂木）がなした。損益勘定（集合損益

勘定）は英米法でも設けるのである。この損益勘定はいつ設けるかが問題である。ついで「2、閉鎖残高勘定に記入した資産・負債・資本の各勘定を〈開始残高勘定〉を相手として仕訳帳を通じて次期開始記入を行う」という。これが大陸式決算法の典型であるとされている。英米法は閉鎖残高勘定、開始残高勘定を省略して、資産、負債、資本の各諸定の直接的な締切りと繰越記入法である。これがC元帳においてはどのように展開されているか。

(1) 片野一郎著『新簿記精説（上巻）』（同文館・昭和五八年）三六八ページ

一 C元帳の勘定体系と、その計算構造——ストック勘定と「決算」残高勘定——

C元帳は全体四〇七丁^{フォリオ}からなるが、その第一丁にストック(Stock)勘定が、そして四〇七丁に決算残高勘定が設けられている。これは開始在高の表示からはじまって、決算残高の表示にいたることを示している。その中間にいくつかのフォリオにわたって損益勘定が設けられている。損益勘定はまず第一二丁に設けられ、ついで二六〇丁にくりこされ、さらに三五三丁に、そして四〇六丁にいたる。四つのフォリオにわたり、それぞれ一つのフォリオ全体をつかって記帳されている。決算期にのみ損益勘定をつくるのではなく、常設勘定として口別損益計算的性格が強い。これは一六六九年四月より一六七一年四月にわたる帳簿記帳期間が一個の会計期間であって、また年次損益計算は出てこない。ちなみに東インド会社の年次計算の成立は一七五〇年代である。四〇六丁の損益勘定の計算の結果(純損益分)がストック(資本金)勘定に転記されてゆく。最後に資産在高と負債・資本の在高が残高勘定に集中される。この残高勘定の見定しはBalance of Ledger C is Dr., Balance of Ledger C is Cr.として借方、貸方頁に書かれる。四〇七丁であるが、これがC元帳の最終フォリオである。

を示して、チェックしたことを示している。つぎに「To Several Accounts」とあるが、この欄は「摘要欄」である。借方の摘要は「To……」という記入の仕方をし、貸方は「By……」という書き出しをしてやる。

つぎの欄は「元丁欄」で、その勘定の相手勘定の記入フォリオ数を示している。これは全部1であるが、1番の資本金勘定が、「諸口」の対応する相手勘定ということである。元帳の勘定書式における元丁欄は今日では消滅して、仕丁欄のみとなり、これが金額欄の前ってきている。C元帳は「勘定式」の勘定であるが、仕訳帳は今日の仕訳帳と大いに異なって、金額欄は借方、貸方の区別はなく、一箇所のみであって、仕訳は日記帳的性格が強く、丁数（または勘定口座番号）によって示す単記式である。

この勘定では貸方金額の方が借方金額よりも \$48,445.10s.-10d. 大きい。これは「Net Worth」の算式における資本「正味身代」である。資産のうちに含まれているものである。この資本分は貸方側にあるのが正常の状態である（(イ)の場合）。バランスをとるいみで、その分だけ借方に示されることもある。これは(ロ)のようにも示されることもある。これは物的二勘定学説の考え方ではあるが、当時はこれが正味身代であると考えられたであろうか。勘定理論史から大きな問題である。こ

こではまだこの考え方はないように考える。実践的にはあまり問題としていないのではなからうか。むしろ、記帳開始、あるいは営業再開時点における在高表示としてストック勘定「在高勘定」があった。この資本金勘定はイギリス

(イ)

負債	資	資本
	産	

(ロ)

負債	資
資本	産

式貸借対照表の基本となる。⁽²⁾

記帳内容について、まず貸方側からみてゆく。By Several Accomps という摘要で £317151-1s.-6d. が記される。Several Accomps は「諸口」ということである。これは仕訳帳の一つの頁全体にかかっているものの合計転記の額である。借方側でなく資本勘定の貸方側からみてゆくことになるが、仕訳帳の開巻冒頭にこれがかかっている。By は何をいみするか、これは筆者には不明であるが、資本勘定の勘定記入は、

(借方) 諸口 [資産] …… (貸方) 資本金 ……

という仕訳記入によるものであった。仕訳帳ではまず資産在高を、それぞれの資産勘定借方に記入する準備をするが、これは同時に対応的に資本在高の記入となる。資本金勘定の記入では、これは貸方記入となるものであるが、摘要は相手科目名の記録を必要とするが多数あるので「諸口」としたが、これは諸資産項目である。相手・対応的な勘定科目名として諸「資産」項目の合計がかかっているのである。

この「諸口」の内容、口数であるが、初歩簿記教育の教科書では五、六口ということで記帳例題ができあがっている。十八世紀初頭の簿記書でもそうであったが、イギリス東インド会社においては極めて数が多い。そこで仕訳帳の一分分全体を合計して元帳にその金額を転記してゆくが、四六項目で、元帳の第二丁より十七丁に勘定設定がなされているものである。仕訳帳の第二頁には元帳の勘定フォリオ第一八丁より三八丁にわたる四九項目が合計 £122006-18s.-4d. が書かれている。仕訳帳の三頁は二つに分かれる。資産勘定は三三項目あって、その合計金額は £291311-7s.-7d. である。

このように三ページにわたって、一二七項目にわたる資産が記帳されているが、資本金勘定貸方には三つの合計が

それぞれ書かれている。これらの総合計が £730569-7s.-1d. であった。

つぎに資本^{ストック}勘定の借方側にうつる。日付は貸方側と同じ一六六九年四月一日である。「資本金勘定の借方」とは何をいみするか。資本金勘定はそもそも貸方勘定であると説かれているが、借方の存在分は何か。ストックとは在高である。期首（あるいは記帳の始め）における資産、負債の在高を示す勘定として資本金勘定がある。これは開始在高勘定のいみをもつが、これは負債在高を示すのである。

「仕丁」をみよう。まず3となっている。ついで5、6、7となっている。4ではないかと考えられるが、仕訳帳の三ページの半分と四ページをあわせたものが3として示されている。三ページ分は一五項目で、四八丁より五二丁まで £8350-1 あって、これが四ページの計に加えられる。四ページは五二項目あって、五二丁から六七丁まで五二項目である。総計は £98746-4s.-5d. である。この仕訳は

(借方) 資本金…… (貸方) 諸口 [負債] ……

である。これが摘要欄で To Several Accounts となぐ。

仕訳帳の第五ページは貸方項目は四八あって、元帳の六七丁より八〇丁にいたるもので、金額は £47728-3s.-3d. である。六ページは五一項目にわたる分で八一丁より九四丁までのもので、£69868-6s.-4d. であり、七ページは三七項目で、九四丁より一〇四丁となるが、金額は £28781-9s.-11d. である。勘定の貸方記入には仕訳帳三ページ半をつかっているが、総合計は £2245123-16s.-11d. である。

このように資本金勘定に要約・集中される記入について仕訳帳を七ページもつかっている。仕訳帳が取引の詳細を示す記録簿であって、元帳は計算簿となっている。資本金勘定の借方、貸方の合計がそれぞれの在高を示し、その差

額（＄485445-10s.-6d.）が貸方にある正味身代（Net Worth）を示す。これが資本であるという考え方で物的二勘定理論がなりたつ。物的二勘定学説の歴史性に關連するが、十七世紀末における勘定理論、勘定思想はどのようなものであったのであろうか。

この資本金勘定は期中にも若干の記入がなされている。この点は仕訳帳にたよらねばならない。ただここに記帳期間の最終結果として純損益が加算され、さらにこの勘定は決算残高勘定に転記されて、締切られるのであった。

① Stock Dr.

1669		1669		1670		1671	
April	1	3	1	April	1	March 31	1
		To Several Accountis	98746-4-5	By Several Accountis	1	By Sundrie accountis...	1
	5	To Several Accountis	47728-3-3	By Several Accountis	2	By George Lord...	1
	6	To Several Accountis	69868-6-4	By Several Accountis	3	By Cott Sheets...	1
	7	To Several Accountis	28781-2-11			By Broad Batts	370
			245123-16-11			By Profit and Losse...	406
1670	October 31	To monie in folio 104	104	1670	October 31	By monie in folio 104...	104
1671	April 31	To the Ballance of the Leidger C	407	1671	March 31	By Sundrie accountis...	24
			1089427-4-1	By George Lord...	14-16-4
				April	1	By Cott Sheets...	138
				30	603	By Broad Batts	4-0-0
				...	720	By Profit and Losse...	353753-18-0
							1089427-4-1

Stock C. ①

一六七一年四月三十日が決算日で、この締切り日の記入の最後に、当期の利益額が＄353753-4s.-1d. が損益勘定から記入される。これはほぼ二年にわたる期間の利益であって資本金額に加算される。このようにして、期首の資産に、期中の追加分を加え、さらに純利益を加えて、総資産額が＄1089427-16s.-1d. となる。これに対して、期首の負債額、その追加額の合計は＄245782-16s.-6d. であって、資産額すなわち貸方が＄843644-7s.-7d. 大きい。これが正味

1699-4/30

0-10-0

58項目

18項目

By a New Accto. f. 260 £5363-16-1

5881-7-10

5881-7-10

身代（純資産）である。これが決算残高勘定に転記されることになるが、資本金勘定の借方記入を行うことで貸借は平均する。ここに大陸法の存在が知られる。このように資本金勘定は元帳記入の出発点であり、利潤分を含めての帰結点であった。

純損益は損益勘定で算出されるが、C元帳においてはまず第一二丁に開設されている。これをうえに示す。

つぎに二六〇丁に転記されてゆくが、これは一六七〇年一月三十一日から始まる。元帳のはじめの日付は一六六九年とあって一月三十一日となるが、四月がこないと七〇年とはならない「年度」という考え方のあらわれでもある。

二六〇丁は借方六三項目、貸方十一項目である。一六七〇年十一月三十日に次のフォリオに繰越されるが、その繰越の摘要記入は *By the following account, the balance of this borne over to folio 353* 「三五三丁への繰越高」となって、*£11009-7s.-3d.* が繰越されてゆく。

三五三丁は、これをうけて記入されるが、借方七〇項目、貸方三十八項目ある。これが四〇六丁に繰りこされてゆくが借方十一項目、貸方四項目である。四〇六丁の勘定をつぎのページに示す。これがC元帳最後の損益勘定フォリオであって、この四〇六丁は前のフォリオにくらべると記入口数は少ないが、一フォリオ全体をつかっている。この末尾で「当期純損益」の算出がなされる。C元帳の純損益は、利益として *£353753-18s.-0d.* が出た。これが第一丁の資本金勘定に転記されてゆく。

純利益が出たので、借方側にその金額が記入されているが、これは

(借方) 損益勘定…… (貸方) 資本金……

という仕訳の結果であった。純利益が資本金勘定に繰越転記されることによって、決算期・帳簿期末資本金額は開始資本金額よりも大きくなる。この間にあって九ページに示したような若干の資本金勘定の変動が期中にあって、期末(一六七一年四月三〇日)に 5353753-18s. が、By Profit and Losse, the Ballance of that accmpt gained by ye commerce…… [營業活動によつて得られた損益勘定の残高(純利益)として……] という摘要をもつて資本金勘

		Profit and Losse Drs.		Profit, and Losse Crs.			
		(406)				(406)	
1671 April 30	...	To The former accmpt for the Ballance...	533	1671 April 30	719	By Sundrie Accmpts gained by Saverall	587916-10-11
...	714	To factors Bantam for	35	By Bengalu Raw Silke game upon	2-6-0
...	609	To factors in Madrasse for	200	By Plantation on pollarone	1857-2-10
...	777	To Sudrie accmpts Lost by	61224-1-7	...	720	By accmpt of conformity for	90-5-3
...	719	To Sundrie accmpts for	24522-11-5				489866-5-0
...	...	To Michael Harney for Loane of	279				
...	...	To discmpt for the ballancing of that	274				
...	...	134468-11-3					
...	...	To Gratuties gaten an aie to	221				
...	720	To accmpt of conforming:for	01630-14-4				
...	...	To John Bagnall for	70				
...	...	To Stocke, The Ballance of this accmpts...	1				
			489866-5-0				

定貸方に記入される。これは今日では決算締切り仕訳として、

(借方) 無償貸付 £353753-18s.-0d. // (貸方) 資本金 £353753-18s.-0d.

となされるものであった。

損益勘定は、決算日に設けられる集合損益勘定ではなく、常設勘定であった。四つのフォリオにわたっているが、これは費用・収益取引が口別計算的性格が強いからである。イギリス東インド会社全体にわたって商品勘定は口別商品勘定として示されているが、これが損益計算への反映でもあろう。商品勘定の歴史的存在様式も一つの問題点であるが、これについては稿を改めたい。ここでは日常的な損益取引が個々に記入されている。

第一丁の資本金勘定「の貸借差額在高」は最後には元帳の最終フォリオ（四〇七丁）の「決算」残高勘定に転記されてゆく。九頁に示したところから知られるように一六七一年四月三〇日に、To the Balance of this Ledger C... £843644-7s.-7d. と記入されているが

(借方) 資本金..... // (貸方) 決算残高.....

という仕訳を通じての記入であって、在高が決算残高に集められてゆく。

すべての資産、負債、資本の残高がここに集められるが、四〇七丁の決算残高勘定もまた借方、貸方のそれぞれの合計が均衡する。勘定の全記帳体系の最後の均衡が示されるが、たったの一行のみである。

この表示の方法は大陸式決算法によっているが、この一行について考えてみよう。

(407) Balance of Ledger C is Dr. Balance of Ledger C is Cr. (407)

1671 April 30 720 To Sundry Accompts — 1178421. 11. 4 1671 April 30 725 By Sundry Accompts — 1178421. 11. 4

一行に示された「諸口」(To Sundry Accounts, By Sundry Accounts)であるが、その内容として借方側は二五五の勘定科目、貸方側は三〇六の勘定科目が含まれている。まことに尠大な数にのぼる。全科目名個々の元帳表示は困難で諸口として一行で総合計のみを示さざるを得なかった。元帳の勘定表示は簡略に一行で、内容は仕訳帳に任かせるというものである。

仕訳帳の記載は七二〇頁からはじまる。これが元帳の「仕丁欄」に720と記されている。Balance; of; the Ledger : C : is debitor to sundrie accounts £1178421 : 11 : 4; and is for the amount of severall debts owing to the companies という記録からはじまるが、C元帳の借方残高の合計は£1178421……であるとするものである。ついで内容になるが、七二〇ページには一三項目、七二二ページには五三項目、七二二ページには五二項目、七二三ページには五三項目、七二四ページには五二項目、そして七二五ページには三三項目で計二五五項目が記録されて、金額の合計£1178421-11s.-4d.となる。のへ六ページにわたるものである。

ついで元帳の貸方についてみるが、仕丁欄には725と記されている。七二五ページの下半分からはじまるが、Sundrie accounts : are debtors to Ballance of the Ledger C; £1178421-11-4; And is for the amount of severall credits; in said Ledger;……とどう書き出し、C元帳貸方残高である諸口は£1178421……とどう書き出しであるが、そのはじめには資本金勘定残高の記入である。Stock: for the credit on that account as in folio...1...として金額は£843647s.-1d.である。元帳の資本金勘定の借方記入と決算残高勘定の貸方記入とが対応している。七二五ページは、これを含んで一五項目で£856138-3s.-10d.である。七二六ページは五一項目、七二七ページは五五項目、七二八ページは五二項目、七二九ページは五六項目、七三〇ページは四九項目、そして七三一ペ

ージは二八項目であつて、科目数の合計は三〇六項目で、金額の合計は£117821-11s-4d.である。借方、貸方は金額が等しくなつて、決算残高勘定は平衡して完成している。最終勘定にいたるまで平均が貫いている。

C元帳において大陸式決算法が実施されている。この四〇七丁が、つぎのD元帳にどのように関連してゆくかは、D元帳の調査をしておらず残念ながら不明である。

(1) J. Winjui, *The Role of Accounting in the Economic Development of England: 1500 to 1750* (University of Illinois at Urbana-champaign Ph. D., 1970 Accounting), University Microfilms, pp.342-3.

(2) イギリス式貸借対照表はわが国の貸借対照表の表示方式と異なつて、借方側に負債と資本が、貸方側に資産が記されている。これは何に起因するかについていろいろの説がある。一六〇五年のオランダのシモン・ステビン(Simon Stevin)の簿記書『数学的伝統録』のなかの表示によるものというのから始まつて区々である。高寺貞男教授の研究『会計政策と簿記の展開』(昭和四六年)にくわしいが、さらに教授の「イギリス式貸借対照表前史」(小島男佐先生還暦記念論文集『現代会計の史的研究』・昭和四八年)がこの問題を取りあげ、「イギリス式貸借対照表の古態は資本勘定の開始残高勘定としての併用形態である開始資本勘定に求めなくてはならないであらう」と結論している。なお高寺教授はこの論文の冒頭、リトルトン・ツンマーマンの『会計理論』(一九六二年)のなかの一節を和訳し、紹介している。「元帳再開の際に」として「他の勘定への記入とは反対に記入される資本主勘定が細大もらさず写しとられると、資産が右に、負債が左に配列されて、イギリス式貸借対照表に合致するということになるのは興味深いことである」と。ストック勘定の摘要表示とイギリス式貸借対照表の表示内容の相似。ストック勘定の表示からイギリス式貸借対照表の形成が示唆されるようである。

(3) この第一ページの冒頭には「神の御名におこつて アーメン」(In the Name of God Amen)と記されて記入が始まる。その下「Journal of Commerce for The General Joynt Stock of the Governor and Company of Merchants of London trading into East India……と続いてくる。これは「ロンドン東インド会社の仕訳帳として、以ての仕訳をする」となる。

二 A・マルコム簿記書の決算理論とその計算体系

「*Journal-Book*」としてとりあげられるものは Alexander Malcolm, *A Treatise of Book-keeping, or, Merchants Accounts; in the Italian Method of Debtor and Creditor*, London, 1731 (イタリヤ式貸借法による簿記すなわち商人会計の論述) である。これは十八世紀初期のイギリスの代表的著作で理論水準も高いものであると同時に、そこに示された例題の記帳例、その勘定体系の大筋がC元帳の勘定表示と同一であり、決算方式が大陸法によっていることから、十七・八世紀の簿記実践の一つの証明でもあるので、とりあげてみる。

本書は本文は九七ページよりなり、そして二つの記帳例題がついている。この例題は日記帳 (*Waste-Book*)、仕訳帳 (*Journal-Book*)、元帳 (*Leger-Book*) の三帳簿制で示されている。この例題が興味深い。さらに附録がある。

本文の第一章は「基本的諸原則および一般的諸規則」(the fundamental Principles, and general Rules)、第二章は「元帳に設けられた勘定の構成と使用のための特殊的な教示」(more particular Instructions for the Formation and Use of Accounts in the Leger)、第三章は「勘定の締切り、決算と誤りの修正」(Closing and Balancing Accounts, and Correcting of Errors) であるが、この第三章がここで問題となる。この標題は「勘定の締切り・決算について」であるが、英文では of the Closing and Balancing of Accounts と記されている。クローズイングとバランスイングはともに「決算」と訳せる。「締切り」は「決算」でもある。歴史的には両者は区別されようが、期間計算が出てきた時期には内容が一致している。この締切り手続きをみてゆく。

この本の例題は三帳簿制をとっている。日記帳、仕訳帳、元帳であったが、元帳を中心に決算の仕組みをみてゆ

第一例題は一七二九年五月一日より十月八日にわたるもので、元帳は十月八日に締切られるというものであった。元帳は全体で十七丁よりなるが、第二丁には資本金 (Stock) 勘定と現金勘定とが設けられている。ここでの商品勘定は荷口別の商品名商品勘定で、ワイン勘定とか、タバコ勘定というものである。人名勘定も多数設けられているが、損益勘定は第八丁、十六丁、十七丁に設けられ、最後に残高勘定が第十七丁に設定される。勘定設定の状況はまことにロンドン東インド会社のC元帳に似ていることに気がつく。残高勘定がC元帳は一行のみであるに對し、マルコム第一例題は全在高のそれぞれを克明に記入しているちがいはあるが、第二例題はC元帳とほぼ同じ。

資本金勘定について。「元帳はいかに開始されるか。また、在高はいかに位置させるか」という説明で（三七ページ）、これは想像上の勘定——まさに名目勘定——であるというが、「勘定」というものの理解には人間の債権、債務関係が基礎にあるという。これを「人的学説」ということもできるであろう。「借方」、「貸方」を Debtor, Creditor の日本語とするとき、人間による貸し、借り関係が基本になっているといえよう。資本金勘定は正味身代というよりも、私が支払い義務があるところのもの、また私に支払われるべきところ（権利）のものの一覧表示である。人間の貸借関係によって在高の本質をみようとするものであった。

資本金勘定は名目勘定で実体勘定の反映（対応的存在）であろうか、それとも債権・債務の一覧表勘定と考えるべきか。これは大陸式決算法では一覧表であるが、英米法になると、資産－負債＝資本の方程式的表示がかくれてしまつて、「資本」のみが net worth として貸方に示され、名目勘定となつてしまつとは考えられないであろうか。

マルコムは「商人の日記帳 (Waste-Book) だ、まず書かれてくるものは、その在高 (棚卸高 Inventory) だ、こ

これは商人に対して負っている負債分 (Debit)、そして「逆に」商人が負っている負債分——資産と負債——を含んでいる財産物件であるが、このような二つの部分からなっている。「三七ページ」という。例題の元帳の最初に出てくる資本金 (Stock) 勘定にこれらが記入されるが、この勘定について、マルコムは資本金勘定は借方 (Debtor) と貸方 (Creditor) とがあるが、借方には棚卸によって私が債務を負うところのすべてのものが、貸方には手許にあるすべての私の動産物件とか、また棚卸を通して私に対して負うもので、これらが資本金勘定に書かれているという。例題 I の第一丁には借方には To Mr. David Johnston といった記入で、債務の人名勘定 (負債) が書かれている。貸方には現金、商品、債権の人名勘定 (資産) と、動産および家具といった資産勘定がそれぞれ示されている。ここに在高一覧表ができあがる。借方の合計額は一八〇ポンドであり、貸方は一九八ポンド十一シリングである。貸方側の方が大きい。

「この勘定は帳簿の所有者の財産の再表示と考えられよう。その性格のなかに、これがなされており、それだからすべての対応する勘定が対極にあるのである」として、借方に負債が、貸方に資産の項目が並べられるとする。この資本金勘定はイギリス式貸借対照表の表示形式の原型でもある。

この例題では東インド会社のように「諸口」という書き方をしていないが、これは記入口数が少ないからできたことである。ただここでは差額 (一八〇ポンド十一シリング) を少ない方に足して、両者とも一九八ポンド十一シリングとするという方法はとっていない。この差額分が正味身代であるが、当時このような概念——これが「資本」概念であるが——があったであろうか。まだなかったかともおもいますが、純利益を決算過程を通じてこの勘定に帰属させている。

ついで損益勘定についてみよう。この例題では三つのフォリオ「三つの箇所」にわたっている。第八丁ではすでに五月二十八日から記帳がはじまっています。期末（十月八日）になって、決算集計のため、そのときに「集合損益勘定」という性格で設定されるものではなかった。この損益勘定の中心にはそれぞれの荷口の商品勘定から算出される損益計算の結果が、期末に集められるのであったが、すでに期中の損益取引が個別的に記入せられていた。

商品勘定は、全企業の一括的総括的表示ではなく個別の商品名商品勘定の方式によるが、取引ごとの損益算出ではなかった。マルコムは「商品売買について、すべての勘定項目で、利益とか損失を分割して表示することは極めて不便で、その勘定の記帳が完了したとき、また決算のときに総括的に記録することが良いことである」（四九ページ）といっている。分記法によらず、このようにして期末に損益勘定にそれぞれの損益額が集められる。

マルコムは例題の十七丁における損益勘定で、借方は \$239-10s-1¹/₄d. 貸方は \$978-1s-7d. と示して締切りをなす。その差額 \$738-11s-5¹/₄d. が当期の純利益となる。これを借方側に加えることにより、貸方との均衡をとるが、この分が資本金勘定に繰越されてゆく。損益勘定の借方側に To Stock……: Neat Gain since May the 1st. —— 1 (folio) —— \$738-11s-5¹/₄d. と記入されて、完結する。

これをうけて残高勘定「決算残高勘定」が十七丁に設けられる。例題では借方三十口、貸方八口で、合計 \$3256-5s-2d. として両者がバランスしている。これが最終的残高平均である。この勘定の形式はストック（資本金）勘定

Stock

とは異なっている。第二丁の資本金勘定は借方、貸方の合計数値はアンバランスであった。

第二例題は第一例題のあとをうけて十月八日より始まる。まず資本金勘定からはじまるが、これは前期末〔第一例題〕の残高勘定(前ページ図示)と同じ形式ではない。

このような形式をとるが、まず、借方、貸方とも「諸口」として一行のみで記入されている。内容的にみて、前期末の残高勘定の諸項目が、借方、貸方と逆になっているが、さらに \$297-95-5 1/2 借方が小さい。これは「資本」にあたる分である。これが、資産諸項目に対応する純資産としての資本金勘定、負債諸項目に対応する差額分としての資本金として、資本金勘定に記入されてくる。資産と負債の「対比的」表示として。

この資本金勘定(第二例題一丁)に当期〔第二例題〕の純利益が「貸方側に」加算されるように転記される。純利益は \$165-35-6d. であり、貸方合計は \$3421-85-8d. である。これから借方にある \$709-95-8 1/2 を対比して、差し引く。これが \$2712-55-11 1/2 であり、資本金勘定残高となって、決算残高勘定に最終的に集められて、締切られる。このような表示「勘定形式」となる。

(Debtor)		(Stock)		(Creditor)		
Oct. 8	To Sundry Accounts	709-2-8 1/2		Oct. 8	Sundry Accounts	3256-5-2
Dec. 30	To Balance...For my present free Estate	2712-5-11 1/2		Dec. 30	By Profit & Loss	165-3-6
		<u>3421-8-8</u>				<u>3421-8-8</u>

そして決算残高勘定に在る高の残る勘定を集計することとなるが、これは右頁と左頁にフォリオ形式で示されているが、貸方側に二項目がのっており、資本金(stock)勘定記入分を独立させている。これをうけて次期の資本金勘定

大陸式決算・締切り法の原点

1729 Dec. 30 By Sundry Accounts.....The Total of my Debts
By Stock..... My present Free Estate

272-12-00

2712-5-11½

Snm 2984-17-11½

立教経済学研究第四〇巻二号（一九八六年）

二〇

では、この資本金勘定分を除外して、借方、貸方記入を逆にするところからはじまる。

「この資本金勘定分を除外」するという点について、片野一郎教授は「イギリスの簿記書では前世紀の末期に入った頃でもひきつづき依然として〈残高勘定〉を採用してきているという事実である。この場合、伝統的に二本建の残高勘定制はとっていない」とされる（『新簿記精説』上巻・三六八ページ）。残高勘定を用いて在勘定を締め切る方式は大陸的法決算方式である。これは決算残高勘定であるが、これに対して「開始残高勘定」という名の勘定科目は設定されなかった。Stock account という資本金勘定を用いている。これは開始残高勘定であるかどうか大陸法の完全実施ということにもかからんで問題となってくる。

片野教授が「伝統的に二本建の残高勘定制はとっていない」とされる点が、マルコムの例題から知られるところであるが、教授は「次期開始仕訳の場合は、資産・負債の各勘定を資本勘定を相手として仕訳帳を通じて開始記入を行なうのである」という。これもマルコム簿記書に示されているが、東インド会社のC元帳で、さらにそれに対応する仕訳帳において克明な記入と仕訳が行なわれていることをみてきた。

片野教授は「開始残高勘定を開設せず、開始仕訳の場合、借方に資産〔の諸項目〕、貸方に負債〔の諸項目〕と資本〔の項目〕を、それぞれ対置する方法もある」とし、「この場合では、財産計算勘定の閉鎖記入に際して〈残高勘定〉を開設するだけとなり、二本建の残高勘定ではなくなる」といっている。一方だけではあっても残高勘定は使用されている。資本勘定を使用する。この資本勘定の性格

はなんであるか。

「さらに近年になると、資本勘定を相手とする仕訳にかえて、借方に資産、貸方に負債と資本を、それぞれ対置する方法に移行している」とされるが、これは繰越記入の簡便化であって、いわゆる英米法に移行してゆくことをいうのであろう。それにしても決算残高勘定はマルコムではのこっているし、C元帳でもそうであった。

この決算残高勘定の作り方には二種類あった。マルコムは「(決算)残高勘定は、第一に「loose sheet」検査表のうえに作られる」(八七ページ)という。損益勘定は仕訳帳記入をへてつくられるが、残高勘定口座への振替記帳は仕訳帳の記入をしない不完全記帳であって、検査表 (loose sheet) での検証によって、それにそくして残高勘定を開設するという方法であるという。これも一つの方法であるが、マルコムは「もし、記帳人であるあなたが、完全な仕訳帳を経由した仕訳記入をしたいとするならば、残高勘定や損益勘定の記入項目は普通には仕訳帳に記入されるのである」といって、二本建の残高勘定の作成方式をも想定している。元帳の記入の完全な仕訳記帳の方法を示唆する。

マルコム簿記書は十八世紀初頭をかざる英国簿記書の第一のものである。イギリス会計学史において見落してはならないものであり、学説史的研究では必ず問題とされている。久野秀男教授は『英米(加)古典簿記書の発展史的研究』(学習院・昭和五十四年五月)で、このマルコム簿記書を取りあげている。教授はマルコムにおいては「今日のテキスト風の『閉鎖残高』・『開始残高』という二本建の残高勘定の方式はみられない」、すなわち「開業財産目録の資料にもとづき、仕訳帳で開始仕訳を行

なのであるが、その内容は、資産各科目(借方)、負債各科目(貸方)をそれぞれ資本主勘定を相手とする仕訳をする。従って、開始残高勘定は、いっさい用いない(久野・一九三ページ)という。この資本主勘定はストック勘定であるが、これを「開始」残高勘定とみられないかどうかは大きな問題である。

マルコムは日記帳(Waste-Book)と区分される完全な仕訳帳(Journal)の記帳をしようとするならばといっており、決算締切りの二方法の存在を示している点は注目されるべきである。

渡辺 泉教授もその著『損益計算論』(森山書店・一九八三年)においてマルコムをとりあげる。本書は損益計算史の研究を実践史的に、また学説史的に取扱うが、後者の一つの方法として書評的に分析・紹介をなしている。

渡辺教授はルーズ・シートの性格について「マルコムの説くルーズ・シートは、すべての元帳諸勘定を締め切って企業損益を確定する前に、締切り手続を正確に誤りなく行うためのいわば決算の運算のために行われるもので、機能的には今日の財務諸表ではなく、精算表の役割を果していたのである」という。久野教授は検査表と呼び、筆者もこのように用いている。

マルコムの簿記体系で、勘定組織の冒頭に設定されるストック勘定は、これを資本金勘定とか、資本主勘定、または在高勘定と日本語で表現されるが、これは大陸法的決算法によるとき、開始残高勘定と考えることができるかどうかの問題点であった。

高寺教授はイギリス式貸借対照表の起源をもとめて、その古態をさぐる。その一つに「イギリス式貸借対照表前史」(『現代会計の史的研究』・小島男佐夫先生還暦記念論文集・昭和四十八年)があるが、「イギリス式貸借対照表以前に開始残高勘定の先駆形態として出現した資本勘定は開始資産と負債にたいする資本主のポジションを表示する機能をは

たしており、「イギリス式貸借対照表の古態は資本勘定の開始残高勘定としての併用形態である開始資本勘定に求めなくてはならないであろう」（七九ページ）といわれている。教授は文献史料としては十六世紀段階のものでこれを追ひ、マルコムには言及しておられないが、これもまた「古態」的状况を説明していた。理論的には二本建の残高勘定の存在形態を示唆しているものであった。これが十九世紀においてもみられる。

イギリス、またイギリス東インド会社においては、この「古態」的形態からはじまるが、これが完成して、開始残高勘定には展開せず、英米法方式が採用されてくる。これは資本勘定の存在態様の発展から知られるし、それぞれの帳簿の末尾の勘定——決算残高勘定ではない勘定の存在——からわかるのである。

三 簿記教育と簿記実践

決算における大陸法が、ヨーロッパ大陸ではない十七世紀のイギリスにおいて実践されており、十八世紀初頭のマルコム簿記書もこれをのみ説明している。もちろん典型的な方式として、あるいは完全形態として、開始残高勘定が存在していたかどうかは問題となるが、仕訳帳を通じてみるかぎり、イギリス東インド会社における資本金（stock）勘定は一種の開始残高勘定であった。これはC元帳の場合であって、東インド会社の歴史において、ストック勘定も形態変化し、その役割が変わってくる。この背景には「英米法」の展開がある。

「東インド会社の」簿記実践と「マルコム」簿記書の説明の幸福な一致をここでみてきたが、理論の展開もいろいろとあろうし、簿記実践も区々であるのが現実であろう。

今日、簿記の実践はコンピュータのめざましい普及のなかで、仕訳帳と元帳を基本とした手記式簿記は急速にそ

の形態、あるいは存在意義をかえつつある。そうしたなかで簿記書は、そして簿記教育はどうあるか。

はしがきでのべたが、今日の商業高等学校で用いる簿記教科書——これは文部省検定済——では英米法による決算法が説かれている。実務の世界ではこの方法によることが、大陸法よりも簡便だからであろう。簡便化したというとは簿記実践が損益計算目的をより中心的なものにしてきているからである。筆者は昭和十年代に「旧制」商業学校で簿記を学んだが、このときはまず大陸法による決算を学び、さらに英米法による方法を学んだ。決算の方式の基本として大陸法も教えこまれたように記憶している。

大陸法と英米法の差は煩雑な方法と簡便法ということのみあろうか。簿記には損益計算として当期純損益額の算出という大目的はあるが、さらに企業の経営遂行上、物件の記録による管理という役割りもある。この管理目的は仕訳帳記入によって担われている。仕訳帳記入の省略として英米法による決算、そして帳簿の締切りがなされてきている。これは何をいみするか。

複式簿記は仕訳帳という「管理」記録簿と元帳という「損益」計算簿の、性格の異なる二つの帳簿系列から成立している。複式簿記の本質規定にこれを要件の一つとしてあげることなされてきた。ルカ・パチョーリの数学書『スママ』——これが最古の簿記書であるが——のなかの複式簿記の論述の篇の名称は「計算および録記に関する詳説」(Particularis de Computis et Scripturis)であった。複式簿記はこのようなものであった。そして、それは「帳簿」に「手書き」によって展開した。これが伝統的な複式簿記法であるが、二十世紀の末葉、二十一世紀をまじかにして、コンピューター簿記が展開してきている。記録・計算の高効率化が進むが、簿記のもつ記録管理の側面でもあるところの営業日誌という歴史的記録の役割はどうなるか。計算の高効率化はめざましく、ここにコンピュ

簿記のメリットが見出される。コンピュータ簿記は結局は計算簿重視になるのではなからうか。コンピュータ簿記は伝統的簿記の簿記一巡の手続きの表示を省略、不要とするようにも見える。

このような状況のなかで簿記教育はどうなっているか。旧制（高等商業学校）の学校制度では簿記という名の講義に多くの時間がかけられ、商業簿記、銀行簿記、工業簿記と別々に講ぜられた。これが新制大学となって簿記の時間は大幅にへり、「簿記」とか「簿記原理」という名で多くは週一回（二時間）の講義のみになってきている。ここでは、複式簿記の原理を商業簿記によって説くことが一般的で、また手記式簿記法が前提となっている。多くの簿記書がそのように著述されている。時代をどのように反映させるべきか。

大陸法はいまや無用ともみえるところになってきているが、複式簿記の本質であるバランス、バランスの貫徹の過程の説明には大陸法は有意義と考えるものであるが、精算表による決算方法は英米法を前提として成立しているようでもある。「仕訳帳」の役割りと、その存在意義を、もう一度ふりかえる必要を感じているが、これも時代の流れであろうか。

いま、東インド会社のC元帳の勘定構造をみると、ここに完成した、極めて精巧な、最後までバランス性が貫徹する複式簿記の体系をみるのである。これは仕訳帳記入がまことにくわしい。仕訳帳と元帳の対応関係がみごとにえがき出されている。

歴史の発展は必ずしも一直線ではなく、後の帳簿をみるとき後退ともみえるものもあって、ジグザグの行程をたどる。後退とも見える仕訳帳と元帳の対応のうちから、英米法が形成されてくるかもしれない。

〔附記〕 本稿の第一節の内容は、すでに「ロンドン東インド会社のC元帳（一六六九～一六七二年）の分析」〔立教経済学研

『究』第三巻第四号・昭和五五年十二月）において、「資本（金）勸定論」として発表した。昭和四十七年度のイギリス留学において、この元帳を発見し、これを調査し、考察を加えたものであった。しかし、その後、仕訳帳記入を対照しなければ元帳分析は不充分であることを感じ、仕訳帳を調査することをめざして昭和六十年の再留学をなした。仕訳帳調査の機会にめぐまれ、決算問題を中心として改めて書きあげたものが本稿である。